げんでん ふれあい 福井

2013 WINTER 第44号

ふくい県民総合文化祭

ふるさと福井人物シリーズ「酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老 酒井 忠勝(二)」

公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。

財団シンボルマーク

目　次　44

●ふくい県民総合文化祭
県民総合文化祭 …… 2～4
高校総合文化祭 …… 5

●ふるさと福井・人物シリーズ
「酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老 酒井 忠勝(二)」 …6～7

●ふくいの伝統行事シリーズ
「敦賀市色浜の産小屋」…… 8

●敦賀市立博物館
誌上ギャラリー／38 …… 9

●福井の民俗文化 シリーズ9
「敦賀・若狭の若連中寄進石燈籠を訪ねて」… 10

●情報ファイル …… 11

表紙の説明

ケガレを排し、清明であることを良しとする日本人の神観念から、赤不浄（経血）・白不浄（出産）・黒不浄（死）がもっぱら忌避されてきました。かつて若狭湾沿岸には出産時・月経時の女性を一時隔離する産小屋が点在しました。なかでも県指定有形文化財の敦賀市色浜の産小屋は、今年国立歴史民俗博物館で模型展示が予定され、目下福井の産育習俗が注目を集めています。

（表紙の写真は、敦賀市色浜の産小屋
詳細は本誌8ページ参照）

2012 ふくい県民総合文化祭

ふくいの文化に触れてみよう！体験しよう！

「2012ふくい県民総合文化祭」が今年度も平成24年7月から平成25年3月までの間、県内各地で開催されています。

当財団では、これらに協賛すると共に、参加する文化団体等に対し、合同練習や強化練習などに要する費用の一部を助成しています。

これまでに開催された県民文化祭の一部をご紹介します。

特別展「若狭を撮る」
―井田家所蔵古写真のまなざし―

井田米蔵氏は明治20年小浜生まれ。地元で長く写真館を営まれ、明治末期から昭和30年代頃までの若狭各地の風景や街並み、暮らし、祭りといった多方面にわたる貴重な記録写真を遺されました。

膨大な写真原板の中から厳選された古写真を紹介する特別展が、県立若狭歴史民俗資料館で開催されました。前回の特別展「写された若狭」と今回の「若狭を撮る」で紹介された中から何点か紹介します。

［写真提供　県立若狭歴史民俗資料館］
各特別展の展示写真を収録した図録は県立若狭歴史民俗資料館（0770－56－0525）で販売中

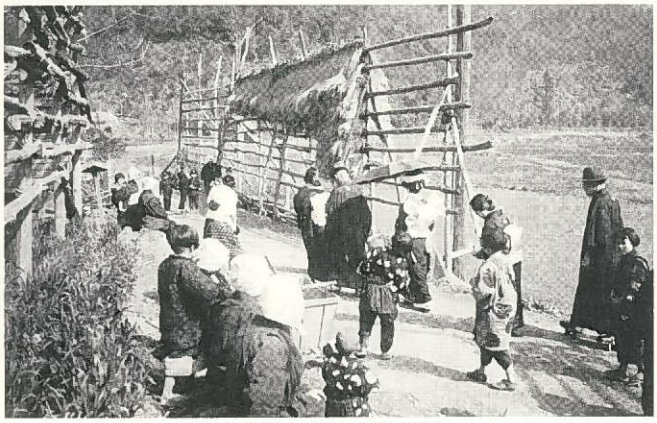
時代と出来事

婦人会の竹槍訓練（小浜市心光寺境内　昭和18年）

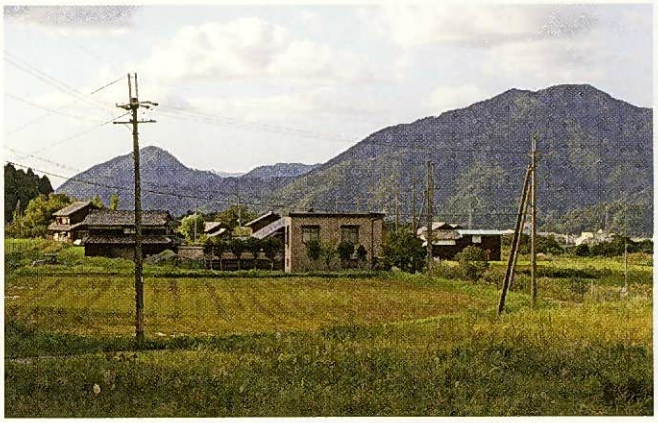
伝統産業で働く職人たち

めのう工場の職人（小浜市　昭和8年）

若狭街道沿いの茅葺屋根の家々と街道松　牛による田起こし（若狭町仮屋　大正期）



嫁入り道中（昭和 10 年代）



上記と同じ場所で（平成 24 年）

頭上運搬で魚を売りに行く女性たち（小浜市大手橋　大正期）

一家総出の農作業　田んぼで昼食（昭和 10 年代）

文化講演会

福井とアジアの恐竜ー移動と進化ー」

日本の恐竜研究の第一人者である東洋一氏（理学博士、福井県立恐竜博物館特別館長）による講演会が、9月8日フェニックスプラザ小ホールで開催されました。

1時間半にわたる講演内容を以下にまとめて頂きました。

日本の恐竜の発掘

福井県では1988年に勝山市の崖で予備調査をしたところ、肉食恐竜の歯が2本出てきたので、本当に恐竜がここにすんでいたということが分かりました。

そして翌89年から93年まで県の事業として第一次恐竜化石調査、95年から99年まで第二次調査を行いました。これらの調査でフクイリュウを研究復元作業などをして、**フクイサウルス**という学名を付けました。これは2003年に論文になっています。

もう一体、肉食恐竜の全身骨格の復元をして、2000年に**フクイラプトル**という学名を付けました。このときには、日本で学名が付いたのはこの二つでした。

2007年から第三次調査を始めたのですが、初年度に非常に大きな発見がありました。というのは、もともと第一次・第二次調査で発掘していたときには、恐竜骨化石を含む地層が一層だけだったのですが、第三次調査では、もう一つ上の新たな地層から恐竜の化石が見つかるようになったのです。

その新たな骨化石含有層は約3メートルの厚さがあり、そこから竜脚類と小型の肉食恐竜が見つかりました。竜脚類は、掘り始めて最初に上腕骨が見つかり、掘り進めると大腿骨、肩甲骨などが見つかりました。

これが、**フクイティタン・ニッポネンシス**という学名が付けられたものです。全身を復元するにはまだ骨が足りないのですが、これは中国産のティタノサウルス類のファンヘティタンに似たタイプの恐竜です。どちらかというと、非常におなかが大きい恐竜です。

竜脚類の進化

ティタノサウルス形類は、竜脚類の進化で言うと最後の時期のもので、フクイティタンはその中の一つです。ティタノサウルス形類は、タイのプィアンゴサウルスなどアジア各地で最近多数見つかっています。

白亜紀の前期になるとヨーロッパ地域から新しい種類の恐竜が入ってきました。それがティタノサウルス類であるということが分かってきました。それまで孤立していたアジアに、白亜紀前期にヨーロッパ地域から新しい恐竜群が入ってきて、従来いた竜脚類との競争が始まったわけですが、結局、もともといたアジア特有の恐竜は駆逐され、侵入してきた一群が制覇したのでしょう。

この日本で出てきたティタノサウルス形類のフクイティタンも、新しく入ってきた新型の恐竜の一つです。日本列島はアジアの一番東端ですから、このころがティタノサウルス類のテリトリーが一番広がった時期だということが分かりました。

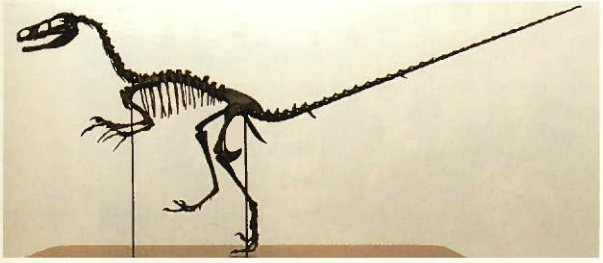
ドロマエオサウルス類の発見

もう一つ発見がありました。**ドロマエオサウルス類**という、小型の肉食恐竜の骨が発見されたのです。2007年8月21日、大きな岩を割ったら、小さな骨がぶつぶつと付いていました。博物館に持って帰り、岩を削って骨だけを出す作業（クリーニング）をしたら、全部で2百個ぐらいの骨が見つかりました。

これは明らかに同一個体のもので、頭の部分、背骨、前肢・後ろ肢と並べてみると、もうほぼ全体の形が分かりました。現在、日本で最も保存の良い恐竜化石です。本物から型を取って復元すると、頭からしっぽの先までで2メートル30センチという小型の肉食恐竜です。羽毛の化石は見つかっていないのですが、いろいろな研究から、前肢には恐らく羽があったのだろうと思われます。

中国で見つかったシノルニトサウルスは羽まで完全に残っています。この福井の新しいドロマエオサウルス類は、まだ研究中ではありますが、シノルニトサウルスなどに非常に近いということが分かりました。

肉食恐竜の後ろ肢と前肢を比べてみると、原始的な肉食恐竜からドロマエオサウルスや始祖鳥まで、後ろ肢に対して前肢がだんだん長くなっていく傾向にあるのです。福井で見つかった新しいドロマエオサウルスは、後ろ肢に対して前肢の長さが78パーセントあります。中国のシノルニトサウルスやアメリカのバンビラプトルは80パーセントですから、おおむねそれらに近いということです。


勝山産ドロマエオサウルス類の復元骨格

また、骨1個ずつの特徴を拾い出して行う系統分析でも、これも研究の途中ではありますが、間違いなくドロマエオサウルス類の中に入ってくることが確

認できています。

鳥に進化した肉食恐竜

肉食恐竜が毛を獲得し、鳥型の羽を持つようになって空へ進出して現在の鳥になった。要するに現在の鳥の祖先は肉食恐竜であるということは、おおむね学説として定着しています。

1995年に中国の遼寧省で見つかって96年に論文になった、シノサウロプテリクス（中華竜鳥）と名付けられた約1メートルの小さな肉食恐竜は、羽毛を持っているのです。いわゆる鳥型の羽はないのですが、恐竜が羽毛を持っているということで、発見当時、世界中の話題になりました。

今では、シノサウロプテリクスのような羽毛恐竜が、やがて鳥型の羽をもち、しだいに鳥類へと進化していったと考えられるようになりました。さらに、肉食恐竜から鳥への進化を見ていくと、次第に前肢が長くなっていきます。そして前肢の指が次第になくなって、最後は1本になります。

羽毛の獲得についても、最初は綿羽状態なのですが、対称型の羽を持って、次に非対称の羽を持つという進化の過程があります。これが肉食恐竜から鳥への進化です。このような、肉食恐竜から鳥類への進化をたどることのできる化石が日本からも発見されたことの意義は大きいと思います。

福井県高等学校総合文化祭

あふれ出す青春の力 伝えよう文化の鼓動

ふくい県民総合文化祭の一環として、第23回福井県高等学校総合文化祭（当財団協賛、福井県高等学校文化連盟主催）が県下各地で開催されています。

県高等学校文化連盟には、「国語部会」「理科部会」など29の専門部会が加盟しており、部会単独でまたは複数の部会合同による舞台発表や研究発表、作品展示、競技会が行われています。

中には全国大会の予選会を兼ねるものもあり、成果の発表と互いの交流を深める場となっています。

今年は、第36回全国高等学校総合文化祭が富山県で開催され、他にも近畿地区や北信越地区の大会なども、関係都道府県持ち回りで開催されています。

今回は「文芸部会」の研究発表会についてご紹介します。

第14回北信越高校生文芸道場（福井大会）

文芸部会による高校生文芸道場（兼北信越大会）が9月8～9日、坂井市とあわら市で開催され、ブロック内5県の高校生、教師約140名が参加。

県内各高校の部員が役割分担して準備を進め、生徒が主体になって運営していました。

先ず、JR芦原温泉駅前に集合し、「三国湊・東尋坊コース」と「丸岡城コース」に分かれて文学散歩を実施し、散策・交流と短歌作りを。続いて、あわら市内の温泉旅館で開会式。末本守文芸部会長（大野高校校長）が「言葉を大切にすることは、聞く人、読む人全ての人の心を大切にすることに通じる。特に若い人には言葉を、美しい日本語を大切にして欲しい。この文芸道場は言葉の修練の場。そういう意味で言えば、高校生全てが文芸部員であって欲しい」と挨拶。

夕食の後、当日創作した作品についてのワークショップ、講師を交えての全体交流会（講師は、高校3年生の時に全国高等学校文芸コンクール短歌部門で優秀賞、第51回短歌研究新人賞受賞の田口綾子氏）を開催。

翌日は「散文」「詩」「短歌」「俳句」の4分科会に分かれ、藤井則行氏（詩人・児童文学者　第5回げんでんふるさと文化賞受賞）他、それぞれ専門の講師を入れて、事前提出の作品について鑑賞や批評を行い、交流を通して互いの感性と表現力を磨き合う場としていました。

全体交流会（講師　田口綾子氏を交えて）

高等学校総合文化祭専門部会別事業一覧

事業名	専門部会
福井県高等学校創作コンクール	国語
第60回福井県高等学校理科クラブ研究発表会	理科
第51回福井県高等学校英作文コンテスト	英語
国際交流体験発表会	国際教研
福井県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会	家庭
第62回福井県学校農業クラブ連盟年次大会	農業
福井県工業学科課題研究発表会	工業
読書感想文コンクール	図書館
第50回高校芸術祭音楽フェスティバル	
（合唱・音楽部門）	合唱、音楽
（器楽管弦楽部門）	器楽管弦楽
（吹奏楽・マーチング部門）	吹奏楽、マーチング
（日本音楽部門）	日本音楽
（郷土芸能・吟詠剣詩舞部門）	郷土芸能、吟詠剣詩舞
第66回福井県高校演劇祭	演劇
美術・工芸、書道、写真展・特別支援学校作品展	美術工芸、書道、写真、特別支援学校
福井県高校放送コンテスト新人大会	放送
第32回福井県高校秋季囲碁大会	囲碁
第21回全国高等学校文化連盟将棋新人大会県大会	将棋
第14回県高等学校かるた大会	かるた
第14回福井県高文連新聞大会	新聞
第14回高校生文芸道場福井県大会	文芸
第37回全国高等学校総合文化祭弁論部門予選大会	弁論
福井県高等学校定時制通信制連合文化祭	定時制通信制

ふるさと福井人物シリーズ

酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老 酒井忠勝（二）

文／中島辰男

3代将軍家光の信頼

徳川幕府の老中・大老としての、忠勝の家光への忠誠心を追ってみたい。

2大将軍秀忠は、かねて忠勝の人柄を見抜き、元和6年、当時34歳の忠勝を家光付きに抜擢する。家光17歳、忠勝は17歳年長であった。

家光は出生と同時に生母お江の方（お初の妹）の手を離れ、後の春日の局に育てられたが、2年後に生まれた弟忠長は終始お江の方に育てられ、両親に寵愛されていたという。

このような空気の中、家光への帝王学の教育は重大な任務であり様々な苦労があったが、忠勝は誠心誠意家光の傅育につとめた。

あるとき家光が疱瘡を患い重症になったところ、弟忠長の側近たちはそれを聞いて喜んだ。忠長を次期将軍との空気を感じ取っていたからである。そのさなか忠長が空腹を訴えたので、台所人たちは急いで食膳に取りかかった。それを見た忠勝は強く側近たちに注意し、「兄君が病に呻吟されている。弟君がそれを喜ばれるはずがない。食事など喉をとおるだろうか」と言って、すぐに忠長の食膳を下げさせた。

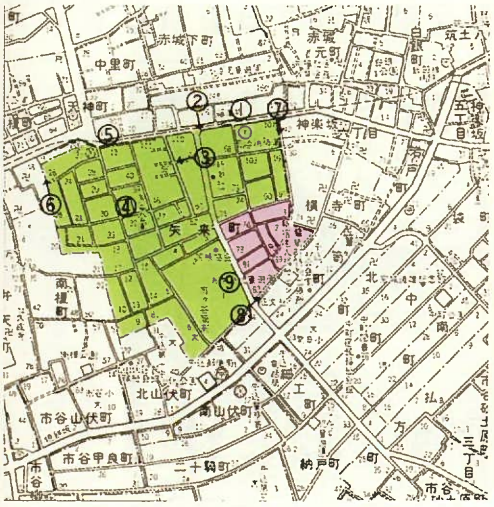
ほどなく秀忠が家光の見舞いにやってきて、「忠勝、先に立て」と命じた。忠勝は、忠長への意に反した所業から手打ちになるかもしれないと思い、意を決して先に立ち、秀忠を家光の寝所に案内した。

家光の容態はよく、病は快方に向かっていたので、秀忠はそれを見て大いに喜び、忠勝の家光への忠誠心に感じ入ったという。

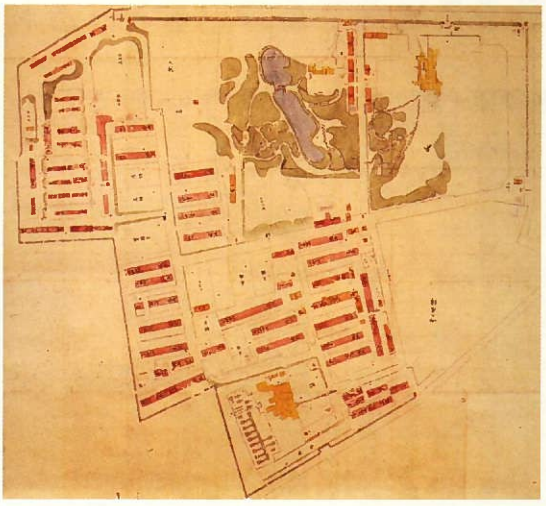
家光は元和9年（1623年）、20歳で忠長を抑えて3代将軍となる。将軍になっても忠勝の忠誠は変わることなく続き、忠勝は寛永元年父忠利と同じ老中に就く。

将軍家光はお忍びが好きで、よく夜歩きをしたという。側近が諫めても聞き入れないので、忠勝は思案の末家光の草履を自分の懐で温めることにした。家光は出かける時に草履が暖かいのに気付き、誰の仕業かと注意していると、忠勝がしていることがわかった。家光は「それほどまでに心配してくれているのか」と反省して夜歩きを止めたという。

寛永16年江戸城の火災で、家光は牛込（前述）の小浜藩下屋敷に避難したともいう。屋敷の周囲は土手に囲まれていたが、警護のためその上に竹矢来を巡らせた。以来、それがならわしと



現在の矢来町周辺（④は矢来公園）


牛込下屋敷図　安政4年（1857）～幕末（酒井家文庫）

矢来公園の記念碑

筆者プロフィール

中島　辰男
Tatuo Nakajima

《筆者略歴》
昭和 3年 小浜市生
昭和19年 県立小浜中学より陸軍予科士官学校入学
昭和20年 敗戦により同校解散、帰郷

福井県連合青年団長、内外海郵便局長、小浜市内外海公民館長、福井県教育委員長、福井県立若狭歴史民俗資料館長などを歴任。
「福井県の誕生―近代の越前と若狭―」「若越に想う」「若狭路往還」などの著作多数

なり「矢来町」の名が生まれたという。

屋敷内の庭園は小堀遠州作の名園として知られ、家光は28年間の将軍在位中に実に150余回も、この屋敷を訪れた。

因みに『解体新書』で有名な小浜藩医杉田玄白は、享保18年（1733年）、この屋敷内で藩医杉田甫仙の子として生まれている。

（小浜市は平成16年暮れ、矢来町の矢来公園に「小浜藩邸跡と杉田玄白生誕地」の碑を建立して新宿区へ寄贈。福井県知事、新宿区長、酒井家19代当主・杉田家6代当主等の臨席のもと、お披露目の式典が挙行された。）

老中酒井忠勝何故若狭へ転封

寛永11年7月、家光は30万人の供奉を引きつれ3度目の上洛をした。もろもろの重臣共々忠勝も供奉している。世にいう「御代替の御上洛」であった。軍列を見物する貴賤、近江膳所から京都街中まで「山川尺地なく群集」する中を二条城に入ったという。

こうして姪にあたる明正天皇に拝謁、天皇の生母東福門院（家光の妹）御料を1万石に倍増、（杉森哲也著『日本の近世』によると、御水尾院から大老酒井忠勝に宛てた将軍家綱への自筆の口上覚書から、当時の朝廷の経済は幕府によって支えられていたことが分かる）京都街中全戸（3万5千軒から7千軒とも）の町人に1軒あたり米1俵に相当する金子を御代替の祝として下賜している。

このような盛事の中で家光は、6大名で計50万石にわたる領地替えを発令した。姉婿の京極忠高を若狭小浜から世継ぎなく断絶した出雲松江26万石へ、老中の忠勝を武州川越から若狭小浜11万3千5百石へ国替えした。

かねて私は、京極忠高はともかく、武州川越10万石、時の老中酒井忠勝を何故北陸の若狭へ転封したのか、家光の人事の背景を測りかねていた。

忠勝の後も、甲州街道の川越は江戸の西を固める要衝として、歴代幕府重臣の封地であった。

忠勝お国替えの縁により、人口30万の川越市と3万余の小浜市は今日姉妹都市として友好関係にあり、私もしばしば訪れているが、両市の関係者とも、その理由について確たるものを共有しているようではなかった。

しかし、古くから小浜は大陸との交流しげく、奈良や京都への文化の揚陸地として重要視されていたのである。

県立若狭歴史民俗資料館の特別展「若狭湾の中世と海の道」によると、「若狭湾を制する者、日本海流通を制す」として解説している。小浜藩域は、北国や中国の物流の揚陸港の小浜・敦賀から今津をへて湖上を大津にいたるルート上の3拠点を占める、若狭一円・越前敦賀・江州高島郡の地位は、京都の経済を左右し、通行税を徴収する重要地点であるとして、老中が支配すべき地域であったと、解説している。

後に大坂に直行する西廻り航路によってその地位は減殺されるが、当時としてわが国の中では大きな役割を担っていた主要の地域であった。このように考えると、家光が重臣忠勝を小浜へ転封したことは理解できる。

忠勝の没後58年に、家中嶺尾信之によって編纂された『玉露叢』や、更にその45年後に同じ家中山口安固によって編纂された『仰景録』には、忠勝の言行や名言など、忠勝の側にあった人々の見聞した逸話が数多く収録されている。

家光が忠勝に駿河18万石への国替えを内示すると、忠勝は「権現（家康）様の地は畏れ多い」として辞退し、では甲斐24万石というと、「信玄様の所とは」と拝辞したとある。

こうして家光はやむなく、領地高島郡に続く江州志賀をと内示したが、「自分が厚遇に預かれば他の諸臣もとなり、国のためにいかが」としてこれまた辞退している。『仰景録』は忠勝を「古今に独歩する御忠誠」と賞賛している。

ともあれ、この時代の武士階級はお国替えにより新たな土地に移動し、百姓町人は代々その土地にあって藩主らを見送り、新たな藩主らを迎えるのである。

「雲浜獅子」と「ささら獅子」

忠勝は領地換えにあたり、今は福井県の無形民俗文化財の「雲浜獅子」（川越では「ささら獅子」という）一行を、川越から関東組として連れて来たことは有名である。前述小浜神社の例祭には、約4百年近く連綿と伝えられてきた「雲浜獅子」が今も奉納されている。

昨秋再発行された冊子「雲浜獅子」によれば、小浜市と川越市は前述のように忠勝の縁により、昭和57年姉妹都市の縁組を行い、以来、関東平野の西方に位置する川越市と日本海の港湾都市小浜市の友好交流が続けられている。

中でも川越の「ささら獅子」と小浜の「雲浜獅子」との競演交流が行われたが、その3匹獅子舞の形とストーリーは共通するが、演技の内容は大きく違って、とても同一のものであるとは言えない違和感を持つという。

同じルーツを持つ舞であるが、どちらが本か、「雲浜獅子」関係者は首をかしげている。特に川越では、忠勝が獅子頭を小浜へ持って行ったので、一時獅子舞を70有余年中止しなければならなくなったことも原因しているのではないかと言われている。

今となっては、ルーツを同じくする兄弟獅子と言わざるを得ないと言う。

川越市制60周年（昭和57年）記念大会で舞う雲浜獅子

県指定有形文化財「敦賀市色浜の産小屋」

敦賀市

珍しい産育習俗の残存

高度成長期以降に生まれた現代人の多くは、近代的な設備のある病院で誕生し、人生の最後を病院で迎えるのが当たり前になっています。しかしかつては、一般的には産婦の実家や嫁ぎ先の家の土間や納戸・寝室で助産婦（産婆さん）の介助によって出産することが多くみられました。

ところが、敦賀半島から小浜市の沿岸にかけて、昭和30年ごろまでサンゴヤとかウブヤと呼ばれる特設の出産の小屋があり、全国的にも大変珍しい特異な出産習俗を伝えています。

産小屋の分布と日本人のケガレ意識

なぜ、出産や月経に際して、別棟の建物を必要としたのかは、日本の民俗学の上でも大きな問題で、一般的には出産にともなう血のケガレを排除するための施設とされています。ケガレが嫌われるのは、いわば日本人の古来からの神観念によるもので、神前に近づいたりお勤めをはばかるためといわれています。とりわけ、月経・出産・死のケガレが重く、赤不浄・白不浄・黒不浄とも呼ばれています。もっぱら身体を清明に保つことが求められてきました。

なかでも赤白の女性の月経に関わる血穢は特に排除されており、かつては生理中の女性は家族と一緒に食事をとることもできず、特に保守的で厳格な地域では村境の岩陰で食べたり、神棚へは決して近づいたりせず、すべて遠慮がちに日々を過ごすのが女性のたしなみとされていました。

かつて伊豆諸島や志摩半島・瀬戸内海沿岸・大分県姫島・鹿児島県十島などとともに、若狭湾沿岸の漁村では、出産や生理にともなう血のケガレを極力排除した習俗を伝えてきました。「板子一枚下は地獄」とよく言われるように、船乗り稼業は海上での危険な作業にさらされており、ひたすら神仏頼みの仕事であることから、とりわけ漁村部に多く分布が見られます。

産小屋の構造と意義

福井県内でかつて集落内に産小屋を特設していたのは、敦賀市縄間・常宮・沓・色浜・浦底・立石・白木・手浦・池河内、小浜市田烏・犬熊、若狭町（旧三方町）小川・常神、神子、美浜町丹生などで、池河内や丹生では常設ではなく、出産のつど簡易な産屋が軒端などに作られました。なかには月経のためのアサゴヤ・ツキゴヤが併設されているものもあります。常設の産小屋は、今も敦賀市色浜・立石、小浜市犬熊の三集落に残存しており、このうち色浜の産小屋は昭和50年に福井県の有形文化財に指定されています。

色浜は敦賀半島東部の中ほどにあり、戸数25戸ばかりの漁農村で民宿業も営み、松尾芭蕉の『奥の細道』巡遊の地としてもよく知られています。産小屋は現在県道沿いの集落の入り口の畑と墓地に隣接して移設されていますが、昭和49年までは法華宗本隆寺の開山堂と蛭子神社の間に建てられていました。木造・平屋・瓦葺・平入りの構造で建坪6坪の簡素な建物で、オクゴヤ（産小屋）とクチゴヤ（アサゴヤ・月経用）に分かれ、明り取りのガラス窓が一か所あり、オクゴヤの梁から一本チカラヅナ（産綱）が吊るされています。戸口の隅には簡単な炊事道具のみ。天井はなく土間だけの寒々しい空間で、ほかには土壁に鬼子母神のお札入れがあり、神仏のご加護を祈り出産に臨みました。

ハラゲ（陣痛）が兆すと妊婦は器量の良い子を産むためになるべく辛抱をし、小屋入りをします。灰・ウラスベ・ボロキレを敷き、背もたれ用の三束の藁を産褥にして、熟練のトリアゲバサンに介助されながら、産綱をつかみ座産で出産します。炊事はいっさい母親が世話をし、村中からいろんな食べ物（コヤミマイ）が届けられるので「コヤコジキ」とも言われました。退屋（コヤアガリ）は初子は産後20日、次子からは15日目に湯を浴びて帰宅します。

今では不衛生で不合理な施設と思われがちですが、家族から離れて気兼ねなく出産が出来、充分休養が取れたこと、絶大な女性の出産の能力をケ（褻）の日常空間から一時遠ざけることに意義があることなどが注目され、近年産育面で再評価がされています。

（若狭路文化研究会　会長　金田久璋）

色浜の産小屋

チカラヅナ（産綱）とお札入れ

産小屋入口（向かって右がオクゴヤ、左がクチゴヤ）

立石の産小屋（新設）

白梅に雀図　一幅

酒井抱一（さかいほういつ）筆

冬の終わりを告げるかのように、ほのかに花ひらく白梅と、その枝の上、寄り添って羽を休める2羽の雀が描かれています。梅の枝は十分な写生に拠りつつ、たらしこみ技法も用いた墨の濃淡で表されています。余分な描き込みを抑え、空間を内包するかのような枝ぶりは、画面全体の余白を余白と感じさせません。

雀の姿は優しい丸みをもって描かれ、枝に憩うその穏やかな様子からも、寒さの和らぐ早春の、ひとときの安らぎが感じられます。雀が愛らしく首を向ける先にも早春の風景が広がっているのでしょうか。雪解けの水も冷たい小川、それとも春を告げる小さな野の花。梅木の根元の陰には、まだ雪も消え残っているかもしれません。

本図は彩色も抑えられ、琳派的な華麗さとは一線を画する作品ですが、画面の外の景色、その風情も見る者に想像させる空間的な広がり、そして詩情が漂います。

作者の酒井抱一は宝暦十一年（一七六一）に、姫路藩主である酒井雅楽頭家の酒井忠仰の次男として生まれます。本名は忠因、字は文詮、暉真、鶯村など。文政十一年十一月二十九日（一八二九）没。抱一は大名の子息として武術、能楽、茶道なども学んでおり、絵画は始め狩野派に、また南蘋派の宋紫石に写生画を学んだほか、浮世絵や土佐派、円山派にも師事して研鑽を積みました。特に尾形光琳に私淑し、琳派的な作品を数多く残して江戸琳派を確立、光琳百回忌に際して『光琳百図』を出版するなど、琳派を後世に伝えるという功績を残しています。

また俳諧や狂歌にも通じ、杜陵、屠龍等と号しています。特に俳諧では松尾芭蕉の門人としても知られる宝井其角（一六六一～一七〇七）の句風に傾倒し、其角の肖像画も描いています。

□絹本著色
□縦97.5㎝　横32.6㎝
□江戸時代後期
□落款「抱一筆」
□印章「抱弐」朱文方印
「文詮」朱文瓢印

福井の民俗文化

敦賀・若狭の若連中寄進石燈籠を訪ねて

暮らしの―古典―

シリーズ 9

明治神宮外苑の国立競技場を新たに立て直す計画が発表された。完成は2019年のラグビー・ワールドカップ開催に間に合わせるそうだ。国立競技場は、明治神宮外苑競技場の跡に建てられた。明治神宮外苑には、競技場の外に日本青年館が建設された。この日本青年館も新しい国立競技場の敷地内にあるために、完成後はその中に入る予定だ。

日本青年館建設の初発の動機は、勤労奉仕した全国青年の活動の記念檀として、石燈籠の奉納を山本瀧之助が提案したことにあった。山本瀧之助は、"青年の父"と称される社会教育の草創期を担った代表的な人物である。しかし、東京一極集中と少子高齢化で地域から「青年」がいなくなり、青年団が失われている現在、山本瀧之助の名前と業績を知る方々はほとんどいない。2011年に不二出版から『山本瀧之助の生涯と社会教育実践』を出版した。この原稿に見通しがついた2009年から、新たな研究方法として、若連中に関連する名称で神社に寄進された石燈籠や鳥居・狛犬・瑞垣・水鉢・石段・鐘などの調査を開始し、嶺南4郡41社の調査を終えた。詳細は3月に刊行される『北陸の民俗』を参照されたい。

高浜町の若連中遺物で最も古いのは、青海神社の絵馬である。絵馬は安永9年11月に関屋村若者中が願主となって寄進した。

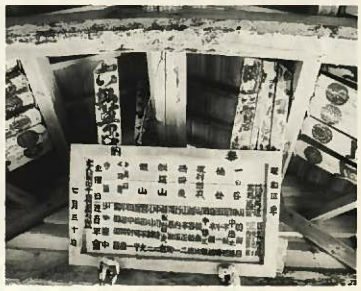
大飯町では、明和9年9月に長井の黒駒神社とその境内社に「施主　当村若連中」と刻まれた石燈籠が古い。また、野尻の六社神社の参道旗柱は戦後直後に「若葉劇団」という青年団の劇団が寄進したもので、大正時代の地芝居記念の石燈籠および歌舞伎舞台の存在もあって、できるだけ早く調査に取り掛かりたいと思っている。なお、旧名田庄村では、下倉天満宮寛政3年2月の若者中寄進の石燈籠が最も古い。

小浜市では、寛延4年の西津北塩屋の宗像神社小松原町若者中寄進石燈籠が古い。同社には太郎右衛門町若者中寄進の絵馬もあるが、逆さまに展示されていて寄進の年代が見えなかった。是非もう一度訪ねて年代を確認したい。また、昭和63年の小松原町川西中老会寄進の宗像神社狛犬、昭和50年寄進の熊野神社仏谷若者中の旗柱など、現代の組織がどうなっているか知りたい。

若狭町上中では、安永4年9月に堤の波古神社奥之院に若者中によって奉納された石燈籠がある。本社境内に現在はあるが、奥之院の社前に建てられていて、若連中の村の祭祀への関わり方を示すものとして注目している。また、日笠の広嶺神社拝殿に飾られている昭和3年の芝居奉納額をはじめとする青年会・少女会の名題額は圧巻である。

若狭町三方の若連中遺物の残存は少なく、5例しか発見できていない。天保5年の神子神社境内にある若者中寄進の「山王宮」と表記された石燈籠が最も古い。

美浜町には、現段階の全調査で最古である菅浜の山の神神社祠に納められている正徳3年5月に若衆共が神社を創建したことを示す石板があり注目される。愛宕神社にも同様の石板があったが現所在場所は不明なのが惜しい。美浜町で注目しているのが、「夜学中」の奉納物である。自然石を用いた大型の石燈籠は、耳川流域と丹後街道沿いに佐田から鳥浜まで存在し、若連中の外に、再若、感応社、忠勇社、夜学中（社）などが寄進者として刻まれている。また、新庄田代の松月寺の石段は、上段が若連中、下段が夜学中で、寄進者の変遷に幕末から明治の時代変化を示されている。美浜の夜学会は明治7年には確認でき、全国的にも早く、その創設の推進力が奈辺にあったのか、それと大型の自然石の燈籠の関係を是非知りたいと思っている。



広嶺神社の芝居奉納額

大比田八幡神社の燈籠

敦賀市で最も古いのは、大比田八幡神社の寛保元年8月の笏谷石製の大型の若者中寄進燈籠である。この燈籠と同じデザインで寛保2年寄進の燈籠は「田中氏」の寄進で、道ノ口の志比前神社の石燈籠が、元禄は美尾谷氏であるが、宝暦以降はすべて若者中となる事例とともに、村の祭祀への若連中の関与の在り方示すものとして着目している。また、葉原の宝暦4年5月の若者中寄進石燈籠は、聖観音堂前にあり、寺院と若連中との結びつきを示している。

高浜町宮崎の佐岐治神社の寛政2年に赤尾町若者中が寄進した水鉢（「浄清水」）の清掃奉仕を青年たちが行った記事が、「地元神社思う心再び　赤尾町・若連中　先祖寄贈の水盤清掃」『福井新聞』（2010年7月7日）に掲載された。郷土の若連中の先輩たちが寄進した水鉢を現代の若連中が大切に守り、次の世代に伝えようとしている。しかし、多くの神社では、若連中は失われ、次世代へ継承しようとする意志の力が失われている。菅浜の山の神のように、小さな祠のような神社にも若連中の奉納物はあり、寺院の三界萬霊塔など、まだ多くの事例があると思われるので、是非読者の方々からの情報提供をお願いしたい。

佐岐治神社の水鉢

（若狭路文化研究会　副代表
敦賀短期大学教授　多仁照廣）

文化講演会 ～私の出逢った人たち～「取材現場から」

家田荘子氏（作家・高野山真言宗僧侶）

当財団と県連合婦人会の共催による講演会が、昨年7月1日、福井県生活学習館において開催されました。

講師は、小学生の時いじめに遭った経験から、口に出して言いたくても言えない経験をしている弱い立場の人々に目を向け、取材を続けてきた家田荘子氏。

取材対象は女子少年院、エイズ患者さん、薬物依存症、歌舞伎町で生きる人々など。

「ノンフィクション作品は絶対に真実を曲げない、脚色は厳禁」、「原稿は必ず本人の了解を得る」、「1日1人以上、直接本人に会って話を聞いてきた」、「偏見を捨て、まっ白な心で相手の目を見て、話を一所懸命に聞くこと」と。

「弱者はすぐ隣にいて、熱いメッセージを送っているが、多くの人々はそれに気がつかない」、「親の思う愛情の伝え方と、子供が願う愛情の伝えられ方との間にすきまがあり、親子関係がうまく行かず、非行に走ることが多い」と。また、「心配をかけまいと、大事な問題は大人に言わない事が多い」とも。「大人がよく見ていてサインに気づき、いっぱい話を聞いてあげることが大事」と。

一方、高野山真言宗僧侶として、著書『女性のための般若心経』では、「ありのままのあなたで大丈夫ですよと訳している」と。

最後に「地域の全ての人々に挨拶を広めて欲しい。最初は返ってこなくても、続けて行くと挨拶ができるようになり、いずれは会話ができるようになる。あの人なら聞いてもらえるかもしれないと心を開いてもらえたら、命を救うことが出来るかもしれない」と。

その他、映画化された代表作「極道の妻たち」の取材中の裏話なども交えながらの熱演でした。

当財団が助成した事業の紹介 ―父親のネットワーク拡大事業（パパと雪遊び）―

子育てを楽しむ父親グループ「敦パパ」

●設立経緯・目的

平成21年に、敦賀市在住の父親で結成（現在会員28名・会員募集中）

父親ならではの視点を大切に、子ども達が父親と共に楽しめるイベントを企画・運営、また父親どうしの交流を深める

ママの評価

「パパが家で子どもに絵本を読むようになった」

「仕事が休みの日に子どもと遊ぶようになった」

●主な事業

- ジャガイモ植え・大根種まき、収穫、調理、会食
- パパと子のディキャンプ、パパとそば打ち
- 親子フェスティバル参加、駅前ふれあい市参加
- 親父の餅つき
- 絵本ライブ・バルーンアート教室（父親として子どもと触れ合う技を学ぶ）

●今後の予定

- パパと雪遊び（平成25年2月17日、バスを利用し、池田町新保ファミリースキー場において雪遊びを楽しみます）

問合せ先
NPO法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ内
0770-22-6447

パパは杵つき　ママは臼とり　絶妙コンビ

敦パパファームで野菜の苗植え

「パパとそば打ち」のため名人から奥義を習得

げんでんふれあい福井 第44号
2013年1月発行

財団ふれあい通信

平成25年度 財団の助成を受けたい団体を募集　申請期限4月20日㈯

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成25年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

1、福井県内に活動の本拠を置く団体
2、構成員（会員）が原則として20名以上の団体
3、平成25年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
4、営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5、特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募の方法

●財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成25年4月20日㈯まで（申請事業の実施が4・5・6月の場合は3月20日㈬まで）に当財団に提出してください。
●申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんでんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

読者アンケートご回答のまとめ　げんでんふれあい 福井 第43号

本誌第43号（平成24年7月発行）のアンケートに総数18通のご回答をいただきありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。

本誌へのご意見・ご要望

「ふくい風花随筆文学賞」
●本当に読みごたえがあり、心に深く残りました。
●特に高校生2人の作品、素直さに頭が下がる。今の若者たちが皆彼らのように素直に成長できたらと思う。

「酒井忠勝」
●とても勉強になる。引続きお願いしたい。

「情報ファイル、イベント情報」
●助成事業の日時がわかって良かった。
●イベントをいつも確認している。今後も多数のイベントを企画して欲しい。

「その他」
●文化的なものへの興味がうすれつつある現代、貴財団の取組みはすばらしい。生活の中に温かい心を育てる文化を広めて欲しい。
●編集が一貫していて読みやすい。ページ数は少ないが内容が濃い。社会・地域の良い教本となる。

●財団が助成している団体の活動内容を紹介されたら良いと思う
（42号及び本号（44号）で、その一部を紹介させて頂きました。今後も出来るだけ取り上げていきます。）

●地区の文化財保護活動などへの協力もして欲しい
（財団助成事業の対象に「伝統芸能・伝統行事の保存と後継者育成事業」、「郷土史の研究活動及び文化遺産の伝承事業」などがあります。ご活用ください。）

※なお今回も
「げんでんとしての原子力発電への取組み紹介記事を載せてほしい」、「原子力、原子物理学など科学のことも知りたい」、「日本は今のところ原発は絶対必要」などの意見を頂きましたが、当財団は地域の文化振興が目的であり、原子力発電の広報・宣伝等はしていません。ご理解をお願い致します。

財団イベント　INFORMATION

文化講演会	講師　桑原征平氏	平成25年 2/10㈰	小浜市文化会館	小浜市連合婦人会と財団の共催
平成24年度 福井県新人演奏会	公開オーディション	平成25年 2/24㈰	福井県立音楽堂	福井県文化振興事業団主催 財団協賛
	新人演奏会	平成25年 3/24㈰		

（発行）公益財団法人 げんでんふれあい福井財団　TEL.0770-21-0291 FAX.0770-21-9070
〒914-0051 福井県敦賀市木崎2丁目9番地16号(日本原子力発電㈱敦賀地区本部4階) HP http://www.genden.or.jp